

いぬせんずの
* こだきお time *



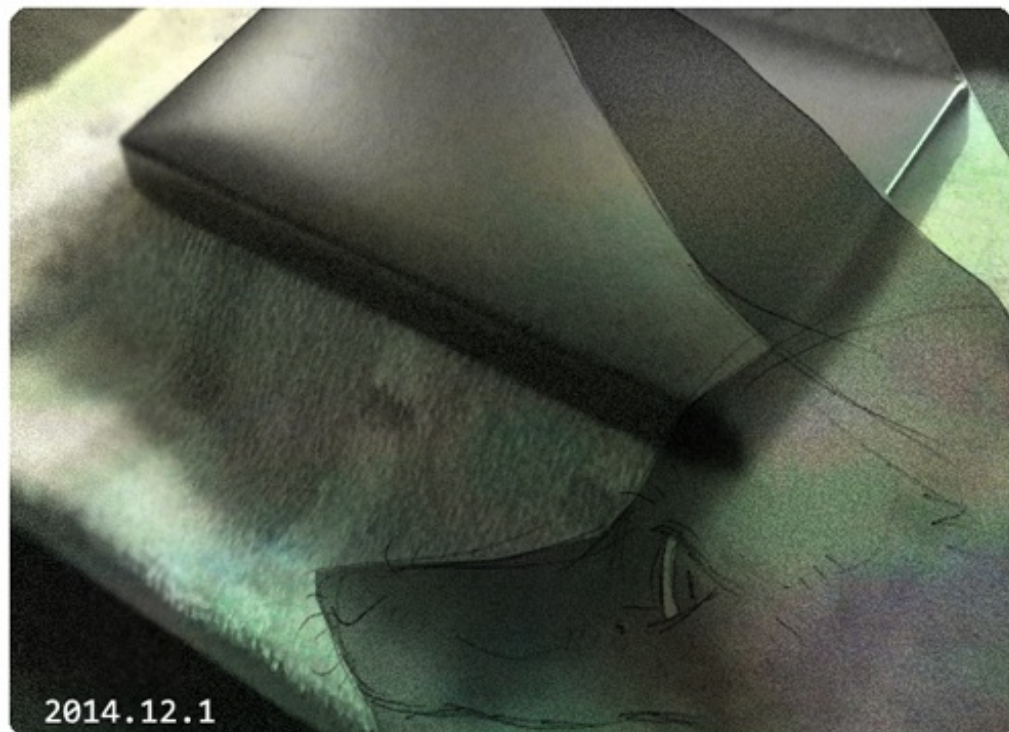
うたいぬ ゆね



もしかしたら、そこに
いたのかも しれない。

夢の奥野の どころかで、
赤いこたつに 黒白のふしぎ犬ずが。
お話、夢想、旅や はかなさ…

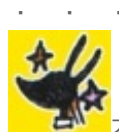
かれらのお話、どんなかな？



こたつの前に すっと一頭 大きく やせた 黒犬がいた
どこか異国の目をして 長い耳を片方 こちらに向け

いぬでは ないのかもしれない
けなみのなかに 無数の めぐる星が見える

”知りたくば おいで
ほどけ ひらく謎で あろうが なかろうが”



犬先生：やあやあようこそ。私は犬先生である。

ということで、おやすみませそ...ぐふう



ラクシャさん：（早くもこたつトラップにっ）

こんにちは、僕はラクシャといいます。

さあどうぞ、みかんもありますよっ



小春日和の空き地に やせた黒犬がいた
陽の照る背中 わずかに赤紫に見え
ずうっと両眼を とじている

重たい頭に揺られるように くずれるように しゃがんで向き合うと
犬は鼻をくくんはたらかせ かれのでないほうの影を噛んだ

紙の音させ 少しだけ ちぎり
ずるっ、と 何回かで飲み込んでしまうと
満足そうに 舌なめずり

頭痛 少し ひいてきた と 思うや否や
細く とても深い赤色の眼を開いた黒犬は 煙になって地の底へ

だんだん強く聞こえる鼓動 怖かった怪物の本の記憶も
でもかれは たしかに 誰も知らぬ頭痛を やわらげてくれた

そんなことが いつだったか あったような

・ ・ ・



犬先生：意外と美味いよ。君の風邪はどうするね？



ラクシャさん：あ、暖かくして治しますので...へぐしっ



あつい日差しが照りつける浜辺に 白と黒の仔犬がいた

白い仔は 雲のような尾をふりふりと 小さなやどかりを見つめ

黒い仔は 長い尾と耳を好きに動かしつつ 大あくびで空を

かれらに かげがない事に 気付いた頃には

はしゃぐような むねのしまるような 楽しげな鳴き声と足音を残し
誰もいなくなっていた

なにかに気付き ひらいたてのひらに

どこからきたのか 虹の粒子の煙をあげる 未知の石のかけらが

. . .



ラクシャさん：そんなことも、あったっけね



犬先生：やどかり私も見たかったぞ...君は見たこと あるかね？

雨上がり



ざあとした雨上がりの空に ふわふわとした白犬がいた

目があうと ゆったりと おすわりしたまま 尾は左に右に
口笛で呼んでみたけど、首をかしげて 方耳を持ち上げただけ

そろえた前足を丁寧にぺろぺろして 柔らかなあくび
うまれたての雲がわき 風にかききえ 風にながされ

うっかり飛ばされた 顔の書かれた風船を追って
白 薄桃 淡い紫 またはくすんだ水色の雲間に
かけてかくれて みえなくなって

しばらくずっと空を見上げ 懐かしい名前 大気にとかした

・ ・ ・

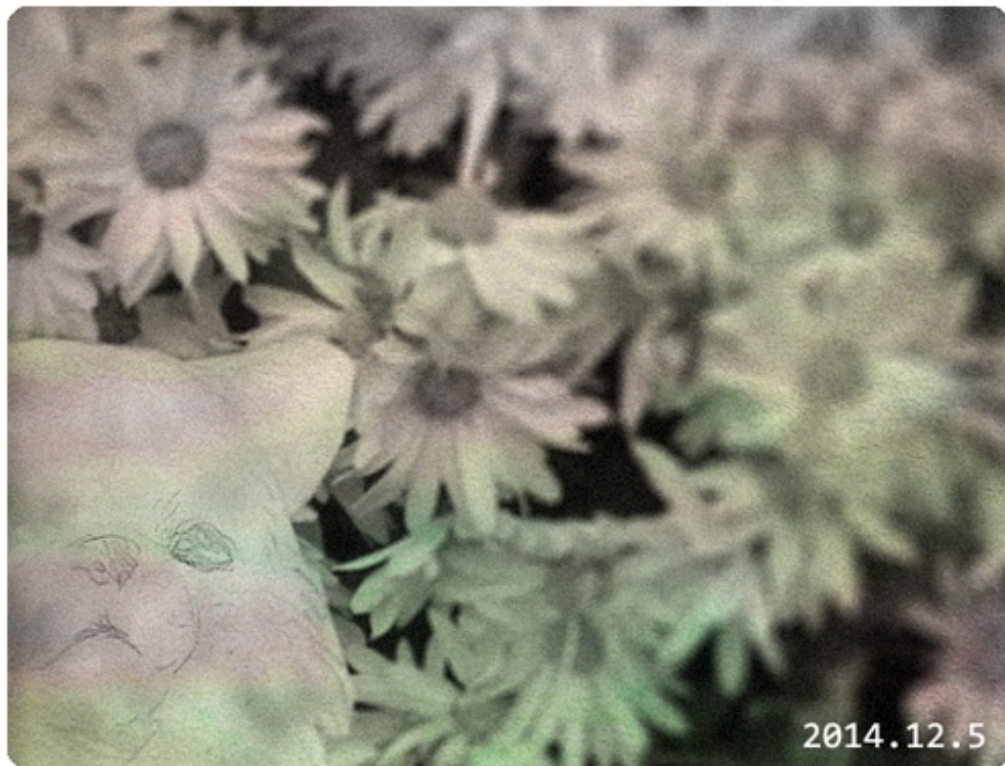


犬先生：冬の雨は骨にくる...さあ炬燵コタツっ

あ、お茶と ぽていとちぶす と蜜柑頼めるかな、ラクシャ君



ラクシャさん：...雨、降っていないよ？



どこまでも花でうめつくされた中から 白い仔犬の顔

かきわけ かきわけ 蔓絡まりながら
仔犬は するする ほこほこと うれしげに
ふりかえりながら 尾を ゆったりと
どこからか照る光をうけた 毛並みが透けて輝く

降るひら 甘い香り 色とりどりの花で出来た海
どこからか？ どこへか？ なぜか？ なにか？
海も ふあんも あしどリモ

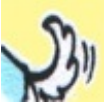
こころ なだらかに 静かに 眠るように鎮め
深く長い深呼吸をつつみこむ おだやかな色と音

いつのまにか 足元で寄せてはかえしている 無数の爛漫と
花中から風と立ちあがり 空へ駆け去る
優美で巨大な 純白の獣

・ ・ ・



犬先生：何やら、よい香りがするなあ...あ、電球替えたぞ



ラクシャさん：はい出来たよ、とろあまい蜜柑パイ3つつ



霧がおおう道に 2匹の犬
足に土した 雲色の仔 宵闇色の仔

ころげて遊んでいた姿のまま止まり 2匹と目が合う

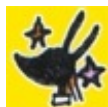
アクアマリンの透いた水色と アルマンドインの重い赤
崩れ果てて今はもう無い 緻密な壁画が浮かんできえた

音も無く霧が薄れ 先程より明瞭になった視界に 石積みの門
登った左右で2匹 また遊ぶように

雲色の仔は 日差しと小鳥と柔らかくうねる 時計を吐き
宵闇色の仔は 月光と虫たちと得体の知れない 地図を吐き

引き伸ばしたように地平線まで果てしない 砂利道の朝にて

・ ・ ・



犬先生：果てしないものだな、この器具の丁度良い魅力たるや...
ということで、ほいっとなっ



ラクシャさん：ハッ体がこたつにつ！



まっさらな雪野に 2頭の犬がいた

光るように白い方と
異様なほど黒い方と

たおれた上に 降り積もったであろう
小屋ほどもある けものの形の 盛り雪
並んで構え 見あっている

どちらも伝え話に聞いた
山奥にすみ 人を守る もしくは食らうと

ふと 白と黒 しんぴとと謎めきの眼で 振り返る
静寂に、低く乾いた声

”そこな君 すまんが古馴染みを起こすの 手伝ってもらえんかね
さすれば...”

・ ・ ・

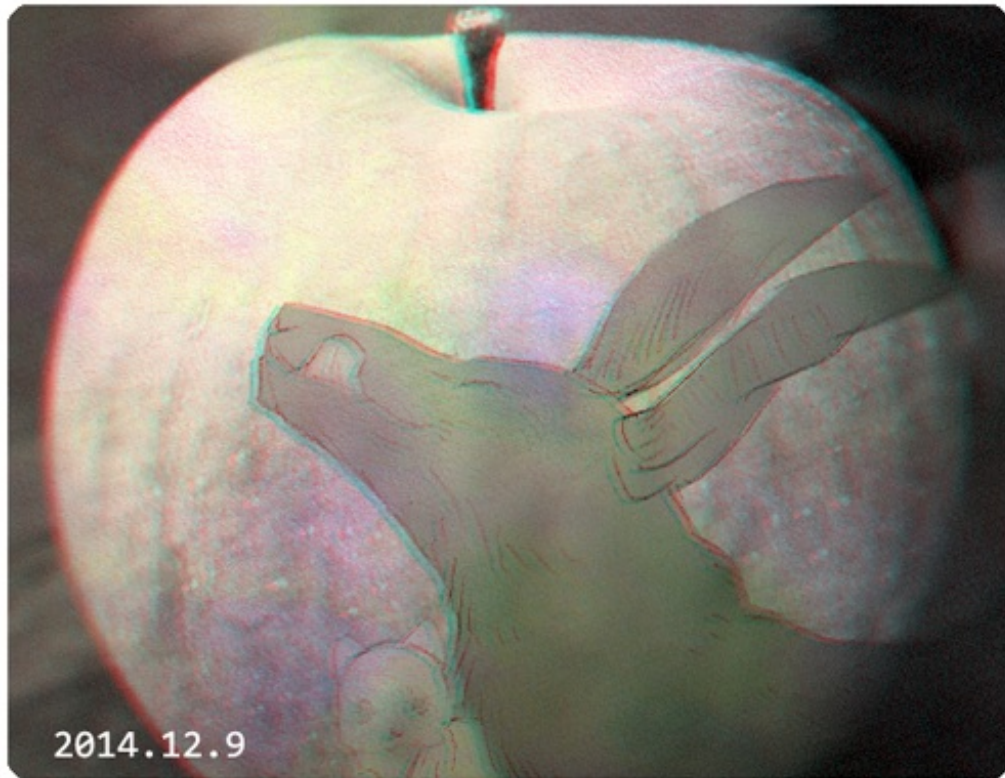


犬先生：フゥ～ぶるぶる ぱくっ...



ラクシャさん：犬先生はこたつで アイスケーキを食べています。

さて、あつめのお茶淹れますね



小さな木の実のそばに 2匹の犬がいた

毛並みの中に夜空が見える黒い方と
照らされてまぶしい雲の様に白い方と

たくさんの 他の実は 小鳥達のお腹へ
その実はひとつ 枝ごと折れて草の上

黒が静かに息を吹くと あやしいほど 立派な赤に
白がそっと前足をかざすと 甘酸っぱい香りと蜜が

しなやかに木陰へ 雲間へ 跳ね去る2頭

遥か砂埃の向こうから らくだの列の 商隊が来る
オアシス 遺跡 のどはしみるほど乾き 水はわずか

丸く赤い 良い香りの木の实ひとつ 夕陽に輝く

・ ・ ・



犬先生：777...わが豊穡の庭、たわわに実っておることよ。



ラクシャさん：こたつのまわりが迷いのフルーツ農園にっ…！

湖



山間の湖に 白犬がいた

音も無くかかると 揺れ動く水面 駆け 高く跳ね
動く絵のように 遊んでいる

そのうちになにか 赤い葉を揺らし 木々の奥から
尾を払って立つ 細身の黒犬

吹き荒れる風のように 走りまわっては噛み 前足でたたき
そのたびに炸裂する けむり 稲光 奇妙なかけら
それでもかれら 宝玉のような むじゃきと しんぴの 腫ずつ

白鳥のボート寄せ合い 何かが棲むと伝わる 湖の朝

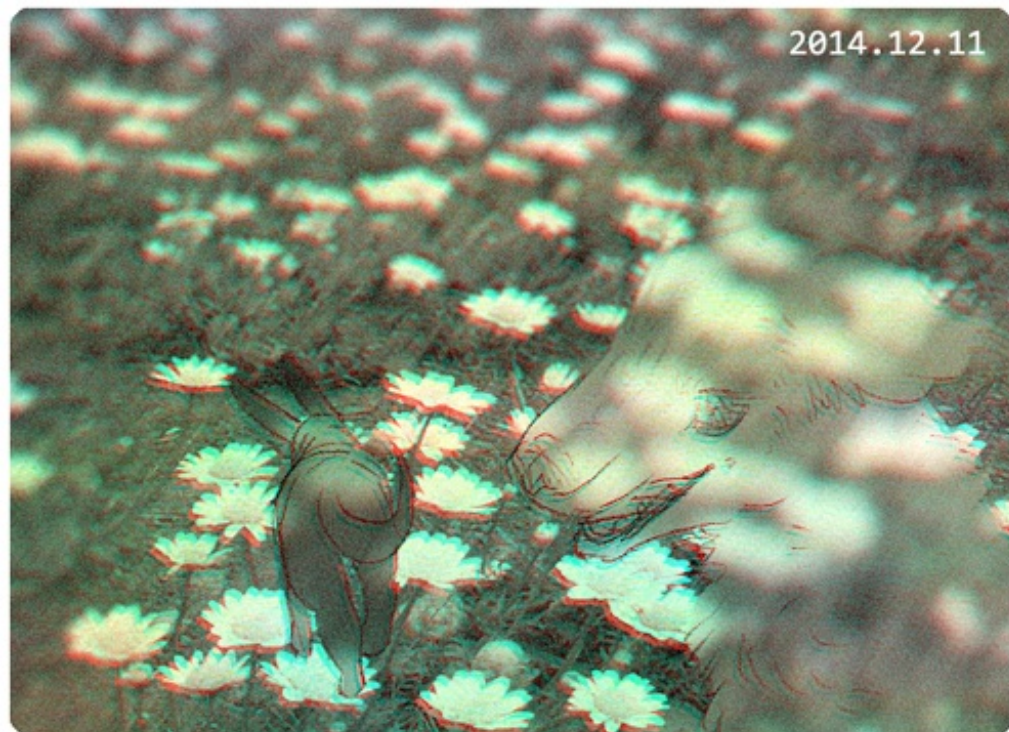
・ ・ ・



ラクシャさん：うっ どちらかな...理論的には...



犬先生：（君、私がjoker氏を2枚にしとることは秘中の秘だぞ...
勝ったらキャベツ太郎あげるからっ）



夢で見た丘陵に 2匹の犬がいた

暖かで 痛みなく歩いて きもちのよい野の 行く先を みちびく ように
ふりむきふりむき 知っているのか 親しげな 黒と白

ふと 聞こえる 長く嗤う様にうめく声
駆け足で戻り 黒は真っ赤な口をあけ 横を 後ろへ飛び掛る

”そちらを見ては いけません”

白から 穏やかな声が響く
猛風と咆哮が 後ろから 前では花の丘陵が くすんでいく

もう少し歩きたい あの場所 じゆうに
なんともむなしくて 鼻を熱くし 上下左右の無い夜空で

ただ白犬が 名残惜しそうに 潤んだ瞳で 尾を振った

. . .



ラクシャさん：ふわあ～…ああ、もう少し記述まとめられるな



犬先生：ラクシャ君の知恵熱で、部屋がほの暖かいのである。ぬくぬく...



対岸が霞むほどの大河の岸に、2匹の犬がいた

体をめいっぱいふるわせ、水しぶきを飛ばしている　黒い方と
揺れる柳の葉を　飽くことなく見上げている　　　　　　白い方

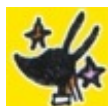
青い山々から　また色味のちがう青の海へ
古代も　今も　思わば先も
地に添った雲がわき　吹く風の流れに　かげひなた　のっていく

その中　ここは　いつの　どこか
見える自分の足元だけ　古写真のよう

逆さ地図広げ　途方にくれるそばで
2匹は耳をあげ　とことこ回り　尾をあげ　わおっと立って
どこまでもな空　雲に乗るまだらの大犬と　挨拶を交わした

人々が異国の言葉で談笑し　わいわいと馴染みの料理に手を伸ばす
まぶしい　昼にて

・ ・ ・

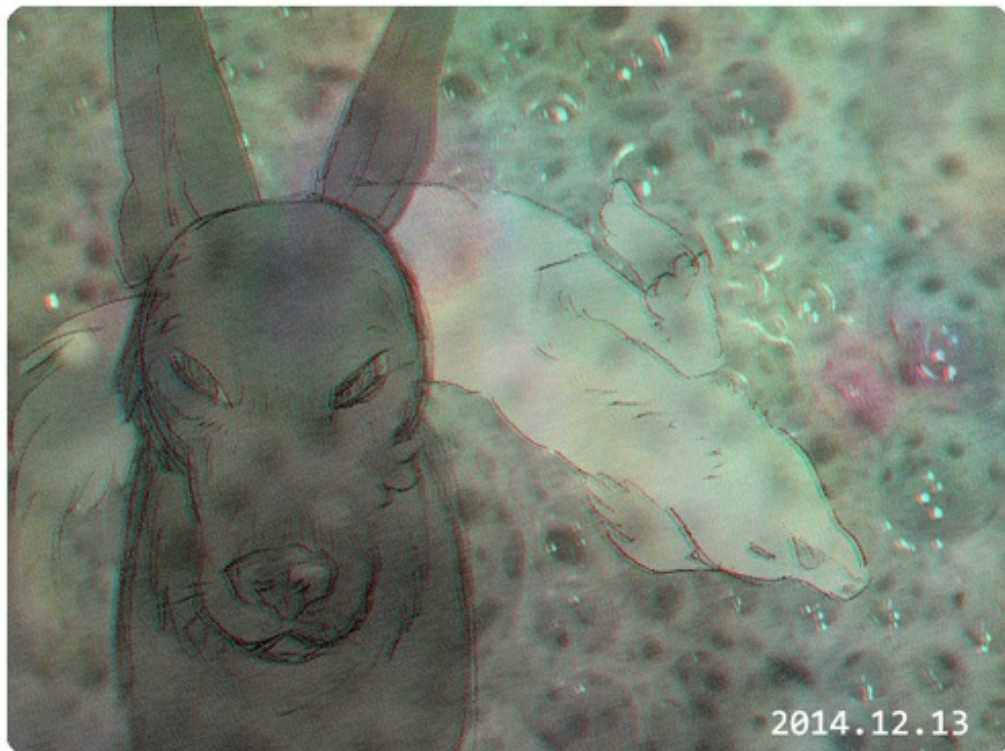


犬先生：ふう...さて、魔域鳴動！特売セールの特ラシなぞ　届いておるかな？



ラクシャさん：あっ犬先生、立つならお茶おかわりねっ

泡



いちめんに泡のたつ中に 2頭の犬がいた

ふうわりと仰向けに寝転がりながら のびをする白い方と
しきりに足元を掘ったり くしゃみをしている 黒い方と

青い眼の白が泡を吹くと 泡の中に島があらわれ はかなくはじけ
赤い眼の黒が泡を吹くと 泡は流星となって衝突し 新たなものが飛び出し

みずからをとわとおもうか はかなくおもうか いぬず まどろむ

それもまた ぷわぷわと浮き ころけ 虹のふちどる 泡の中のこと
その泡もまた 泡の中の 泡の
その泡もまた

その泡も・・・

・ ・ ・

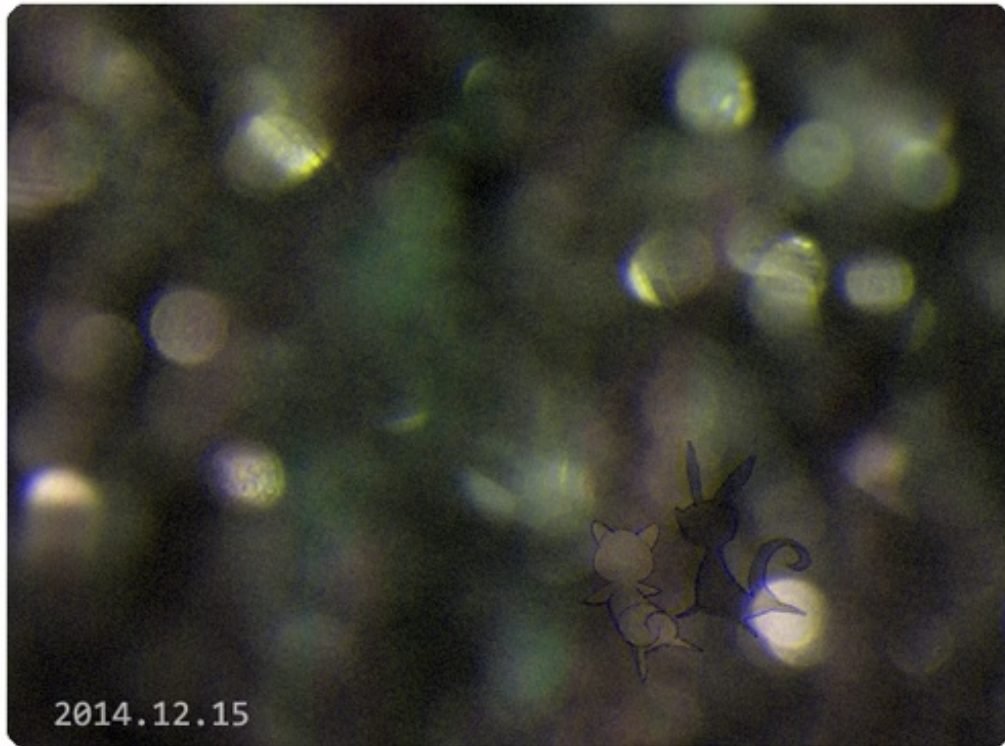


ラクシャさん：あれ、なにやら泡がいくつか 浮いてる...？



犬先生：わが腹の宇宙からだが、屁ではないぞ？

灯り



指の芯まで冷えるような夜に 2頭の犬がきた

毛並みを寒げな水気と雪の房だらけにした白と、黒

ぬるくした湯 タオル ドライヤーから、逃げたり 噛もうとしたり
茹でただけの、味付け前の料理 食べるか聞くうち あっという間に

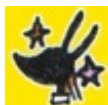
あまりが広くなりすぎたソファー
眠たげな大きいしろくろに はさまれ座る まろやかな苦笑
壊れかけたテレビの画面に 赤帽子の小人

天気予報のようだが 大小のプレゼント箱のアイコン
もたれかかる2つの頭を のっそりとなで
若い頃にどうしても渡せず 果てになくしたものが
別のところで 満ちはじめる気がした

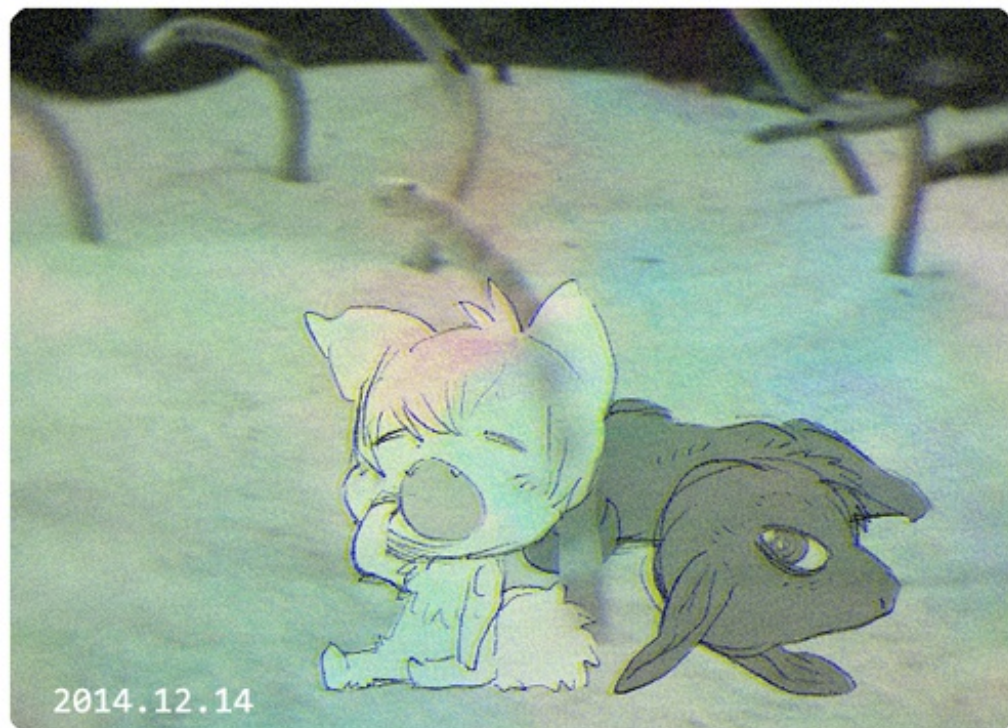
. . .



ラクシャさん：暖かったね。



犬先生：礼でテレビを直したら、牛のような鹿も呼び 大喜びだったなあ。
そして さりげなく こたつも進呈したのである。



水族館の水槽のなかに、白と黒の生き物がいた
こいぬのようで だけどそうなら へんてこで

ぼんやり魚の手前 おおあくびの 白い仔と
しきりに砂をかき 舞わせて遊ぶ 黒い仔と

しかくい海の ひとこまひとこま
まるい目で 色とりどり おをひき ひるがえり またたき 泡おどる
ずうっと泳いで生きていくのは どのようなものだろう
いっぱいの青色の中 ゆれる光のした 今までと今の あれこれ

イルカのげんきな声と笛音 残響のように聞きつつ 帰り道
雨雲ながれる海原の空 白と黒が 水かきしていた

にひきは どこまで かえるだろう

. . .



ラクシャさん：わっ なっなんか足ぱくっと...



犬先生：ウン 先程からこたつにおるよ オオカミウオたん。



机の上に 2匹の犬？

白い方は 頭をこくつと うたたねしつ
黒い方は 長い耳を アンテナがわりに

置いてある卵に 軽く もたれて

灰白の曇り空 草は冷たい風の波
星を見るのを諦めて 本のおともの茶を淹れる
耐熱硝子のポットに 花が開くのを待ち

卵をみれば 割れている

あるはずの 中身が無い

そういえば胚は進化の過程のようで
たまごは破壊と新生をあわせ秘めるようで
改めてここに湧いたふしぎの雲に惹かれ 殻をみつめる

そういえば2匹は、と見渡せば

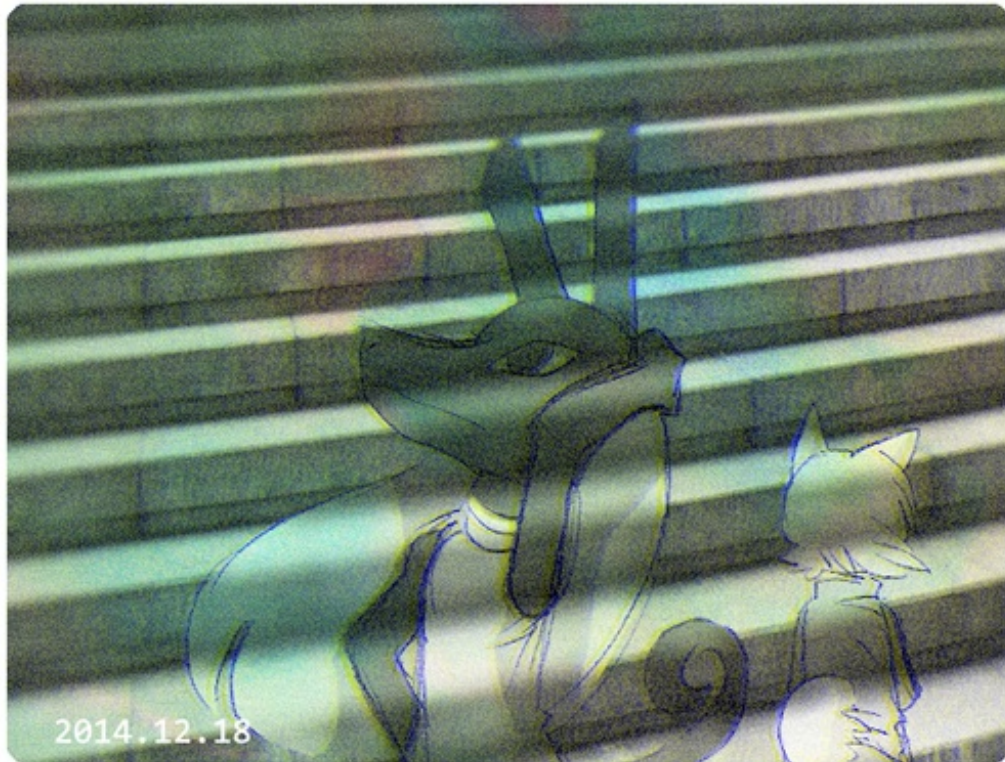
うまれたての星を引きつれ 窓透けてゆく ところだった
残ったおっとり星 手にくるむと 寝息と鼓動が



ラクシャさん：仔犬どきの記憶、少しだけ覚えてるよ。



犬先生：ふははは、私など.....I-トもう何千年前だったかなあ？



長い階段の途上で 犬に似た人々に会った

風もなしになびく長い髪から 星と異形とをこぼす 黒い方と
夏雲の記憶のようにふわふわとした尾を巻いた 白い方と

ひとこと ふたこと

ひざに手を添え あれた呼吸を整えるあいだに

黒は赤い瞳をほそめて微笑み 長い脚をはこんで 降りていき
白は青い目を伏してうなづき ふりかえらずに のぼっていった

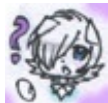
さて さてと もう 立ち上がらないと

駅のレジ 温めてもらった好きなおにぎり おいてきた
仕方なくもどろうとする目が見た 上下半分ずつの、昼と夜

・ ・ ・

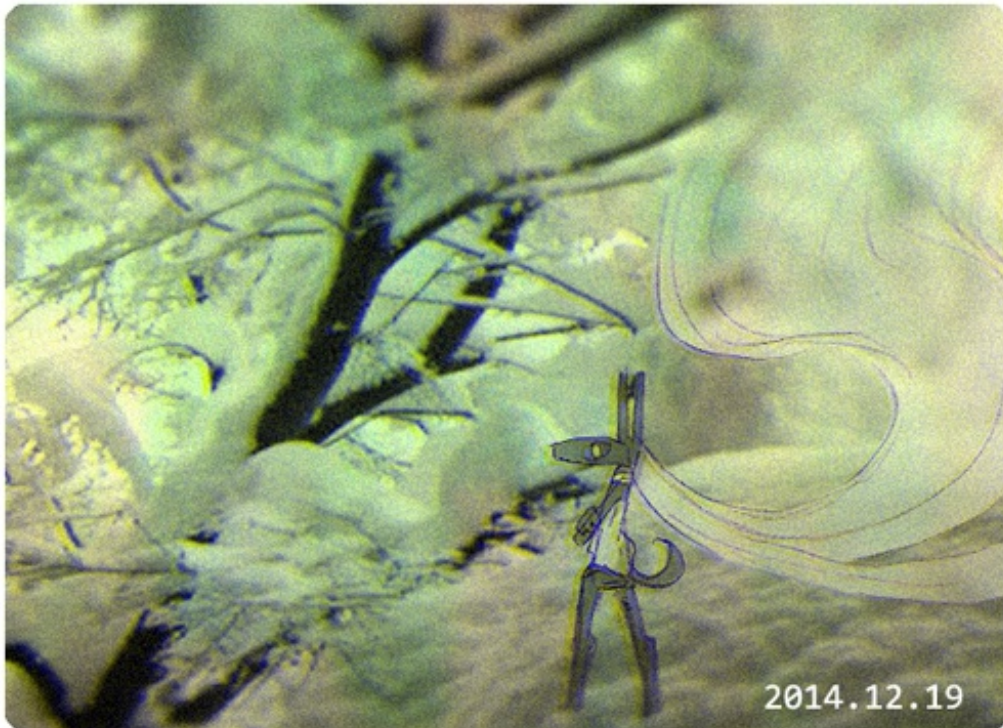


犬先生：あつあつあんまん頬張りすぎて わが有能なる舌がっ...



ラクシャさん：ふーふーすると冰雪の息に、吐くと業火の息になるそうです。

さあ、冷めるまでお茶と みかんね。



のっしりと白い森を、黒い人影が歩いていた

こだちのかげから よくみると黒犬の顔
たなびく煙のような髪に、星と目玉 はねている

恩あるかた たずねて？
けれどもなかなか 見当がつかぬらしい

あるときは 湯気とともに おった傷を癒してくれ
あるときは 圧倒的な冷気で 自然界の威を発し

またあるときは やせ衰え 干からびたような体中を 潤い満たした

形がいろいろにうつろいなさるが
毒多きじくうに あまねく そのはず...

うつろいながら どこにでも
それなのに、そんな恩さんも いるんだなあ
でもうつろいながら どこにでもいるなら、

ここからでも、きっと

驚くほど赤色の目、またたいて 長い口 にやりと
きっとそれでも 微笑んでいる

冬眠からうっかり起きてしまった おでこ

長くとがった指で やわらかく なぜてくれた

・ ・ ・



ラクシャ：冬眠...したいだふ...わふふ.....ぐう



犬先生：（すっかり寝とる）

ラクシャも相当気に入ったようだのう、おこた。



灯台のそば 風の声ききに來た
耳から重油のように 傷にしめていた欺瞞 流れ出す

それですべて まっさらにならない
ほんとうのようないふとして話される外見がなんであれ
その中ころろ どうせみえない
みたくないし みせたくないし
みえなくたって 細いけど きれいな色した糸やびいだま あるよ

落ち着けようと 静めようとするたび なにかで ささくれ
重油 耳から ますます 折角の風景の音 ふさぐように

そのとき 柔らかな 白い手 視界に
白い犬の頭のひと まるやかな青色の眼の

おおきくぐるり 手を回す
ぐるり ぐるり そのうちに 重油みな 綿菓子みたいな雲になった

風の声 ききにきました
風よごすのでなくて ちょっと 風の声だけ いまは聴きたかった くて...

おどおどと つぶやくように言い終わるのをきき ころろからのように頷いて
白犬さん たしかに 穏やかに 微笑んだ

昔飼っていた犬の 仔に どこか似ていた

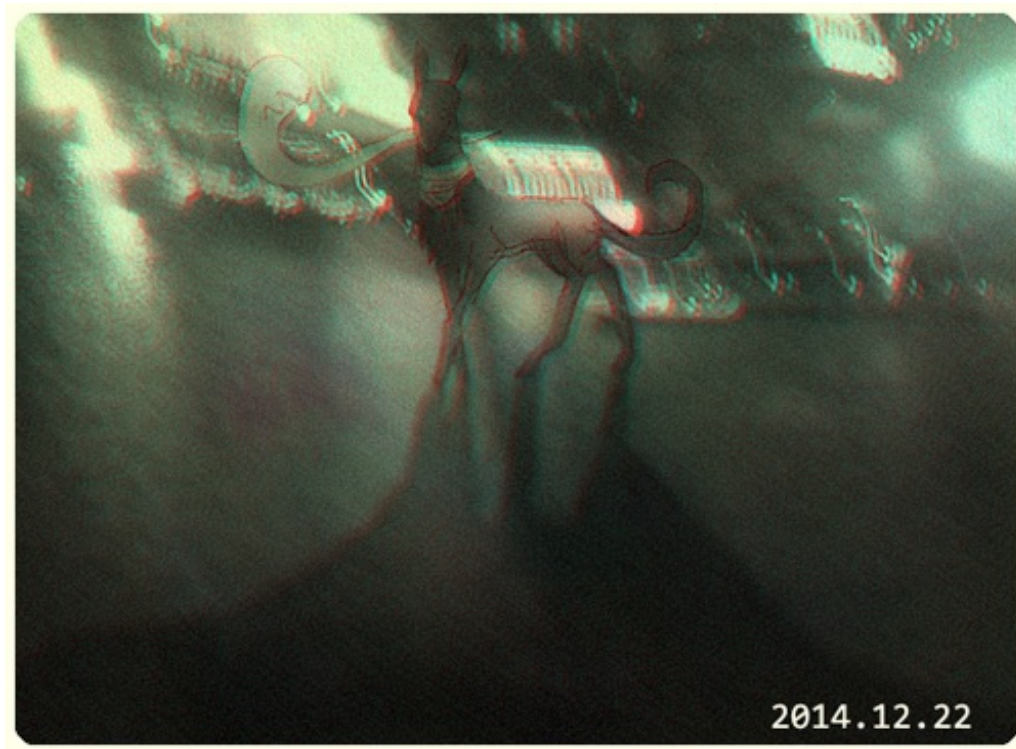


犬先生：おや どうした、ラクシャ君？



ラクシャさん： こたつ内にオールトの雲がっ！

夜景



ころがり渡る 旅のきねんに タワーで遠望
風で多少 ぐらつくのも醍醐味と

鷲の足爪のように カメラをがっしりとかかえて
すきっぱら こんな高所からでも鳴る様な
屋台や飲み食いの店 けんそう にぎわい

行き交うものの意気の熱たち自体が放つような 灯りがにじむ
幾千幾万 そのぶんの意気 いままさに
ひとつおわり あるいはつづき はたまたかわり うまれ している

シャッターの指の一瞬手前 なにかが光の看板 よこぎった
それを逃がさず噛んでくわえた 金装飾 黒い獣
切れ長の赤い目をし 闇に透け ゆるがぬ脚は長く 相当巨大な

いつからか どういうわけでか 守るように いきいきと
街が日常のひとつと してか しらずか

1 枚のぼんやりした確認画像残し 獣は星の煙を吹き上げ 消えた

・ ・ ・



犬先生：ふごつもぐもぐもぐっ...！



ラクシャさん：なにを食べてるのかな…？

さて、僕らもアイスいただきますか。

足跡



長い長い廊下だけが照らされた空間の床 2列の足跡をみた
白い列と、黒い列 先で点々増えては 後が煙に
牧羊犬のように なにかの群れを みつつ行く

古代のいきものの大群 何もいわず 絵の体して 1歩1歩
群れの足元は 足跡でなく伸びる線ずつで

黒が その中の1匹か1頭かを飲み込むと 線は細まって定着し
白が雲をはき どこかに新たな生物の 枝分かれ

大量の なんともいえない形の生物 立ち止まった先へ 進めない
だいぶ先にいた黒い足跡 風音とともに戻り まとめてのみこむ

進んでは戻る歯車 まばらな秒針の音 思わず耳をふさいだが
うづくまる目先に見え出した いくつもの銀河の浮く黒い毛並みの中に
のみこまれたであろう異形たちが 遊泳するのがみえた

それでは白は あの白い犬さん どんなだろう

いっそくとびに 生物達を追い抜こうとするあとに
赤い目の黒犬 ひたっと付いて 走り来る
鼓動づいた時の音を鳴らし 待つように 守るように

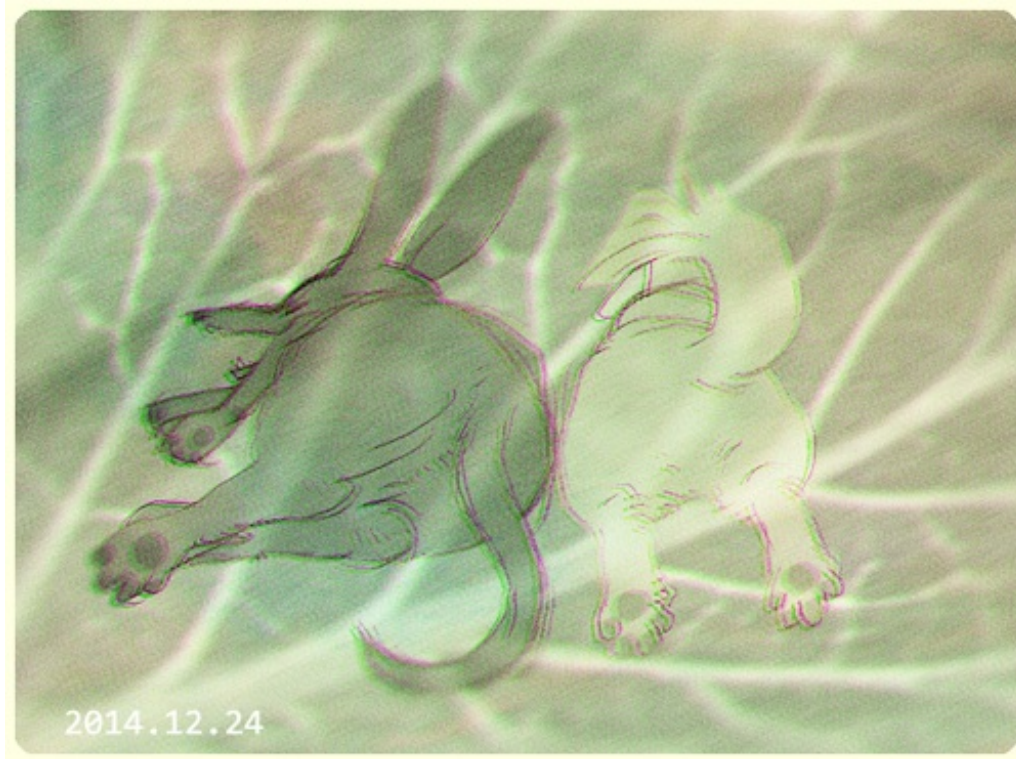
夢からさめた青い部屋に 遠くから 遠吠えと月



ラクシャさん：犬先生、こたつむり化しとるっ...



犬先生：我がカオスなる腹時計が 暖かくして眠れと告げておるのだよ...えっぐし！



きゃべつを前に 首をかしげた

”これは特別な一個 交換をしていただけないか”
見たことも無い形のひとが みたこともない物体を

よっこらしょ と まわしてみたが
おかしくはない 私の畑の まるまるしたきゃべつ

わたしかねて 今 まないたの上に置いた
鍋の水は ぼこぼこ しはじめ

いけない、と左手 ぐっとひらいて添え
大体半分に当りをつけ 包丁を置いたら

指のはら程の 小さな白犬さん 黒犬さん
あぶないものは わっとすぐ遠くへ離し
鍋の火を止めて まじまじと

尻尾ふりふり きゃん！と2足立ちで ごあいさつ
白い背 黒い背ひとさし指でなでたら 飛んでった
どこかから 惜しげなためいき

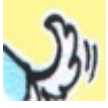
さてこの 星と雲を吹くきゃべつ 何にしよう？

・ ・ ・



犬先生：私は今年、ほどよい魔犬であろうと勤めたので

魔域のさんた一氏にカスタマイズこたつを願いたい、しかしアレも...



ラクシャさん：僕は...寝ながらも作業してましたっ！といわれたなあ...

さんたさんに、貼る ぽっカイロ 置いておこう。



いつだったか 暗い山道に 白い人影 うずくまっていた
地面になにか うっかりしたようで 尾もしゅんと下がり気味

なんだか立ち去りずらくって でも聞きずらくって
一緒にうずくまってみた笹の陰に まるい眼鏡

土と葉と蜘蛛の糸のあと 払って 柔らかく安堵する 白犬の頭をした人
暗がりでも水面のように輝く 空色の瞳で どうもありがとう、と

聞けば行き先 同じ頂上
灰色の雲がものすごい様相で行き交っていたのが 今のどか
またお天気は うつりかわってゆくけれど

風とともにいつのまにか白犬の人は消えていて
遠くの 青くぼんやりした稜線で 黒いなにかが尾を振って跳ねた

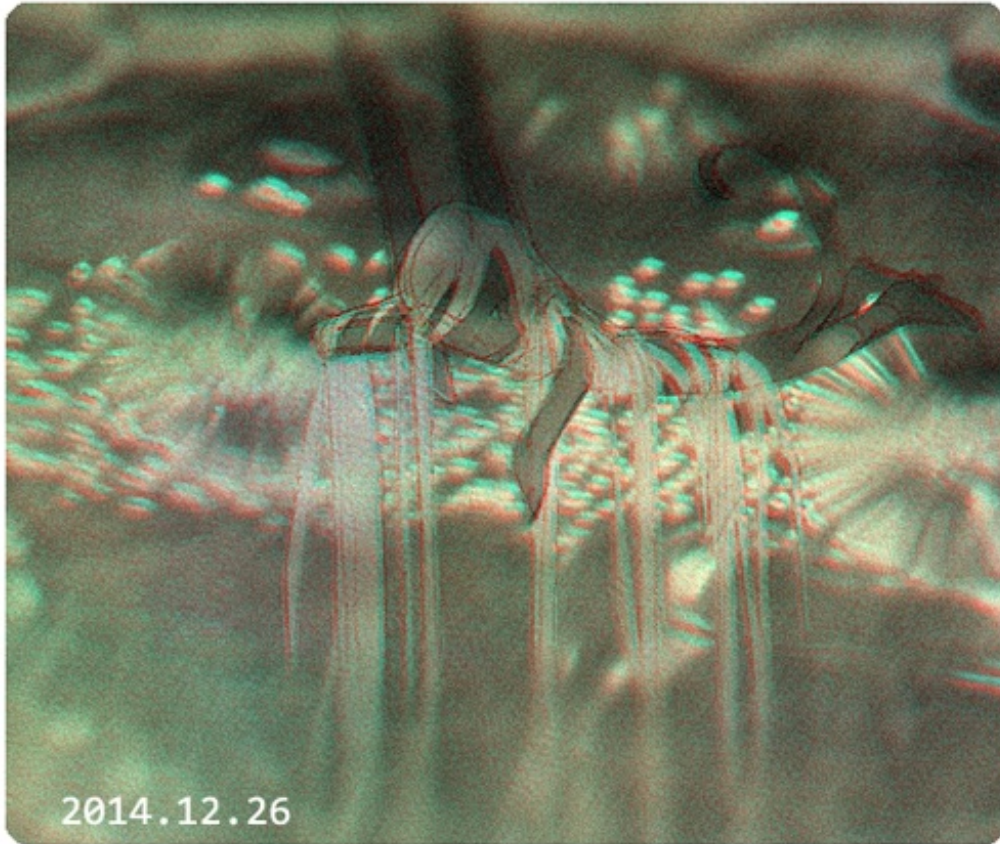
・ ・ ・



犬先生：ほわっ今年はアヌビス臥像1／1・ヒエログリフ屏風付きであるぞッ！



ラクシャさん：僕は枕元に折りたたみ式 お昼寝野原がありました。
これでまた しばらくがんばれるなあ



古い太鼓橋のらんかんに、瓶
その中 とぼとぼ ひとりでに水が波打ち
小さな泡と一緒に黒い人影 まどろんでいる

靴に挟まった小石を なんとなくほじくり
また瓶をみると 瓶の中の人も 寝そべりながら

”このなかの水がなにか当てたら 今ほしいもの 現してあげよう”？

ふへっとためいきのように笑って、考える
涙、よっぱらうもの、水、氷河の氷のとけたやつ、はたまた...

ふっと忘れていた用事思い出し、重たい買い物かごを両手で持って走って 家路へ

どうしたってあたりにくい あたった子が大はしゃぎしていた 未知の楽しさ詰まった缶
思い出すたび くやまれる

さてあれは なんだっただろう？

. . .

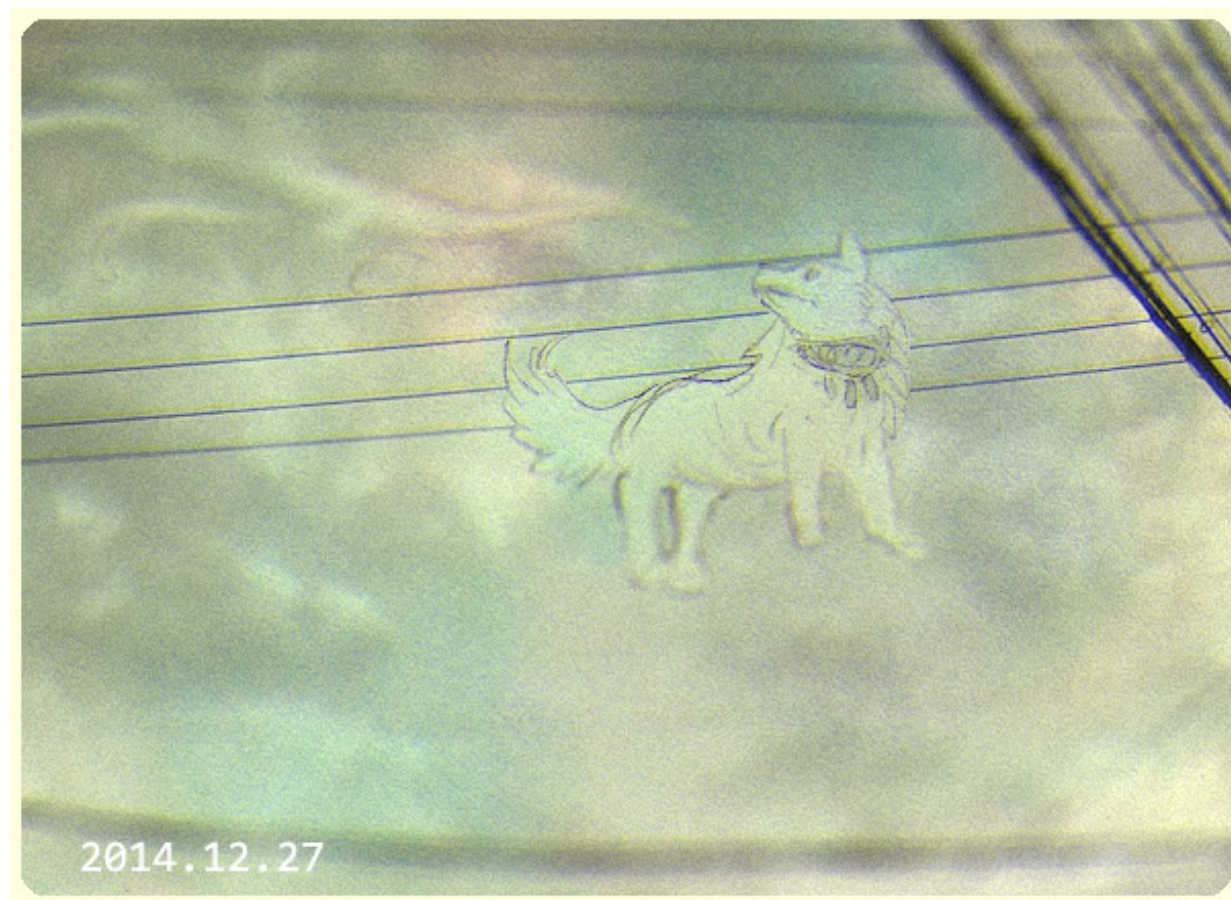


ラクシャさん：うっ この瓶開き難いなあ...あっ！



犬先生：とびちったな...いやいい我が魔法で巻き戻そう...あっ！

虹



ある午後 車窓 とふっとふっという足音と 動物の息づかい 空から
見上げれば 銀飾りをつけた 純白の犬

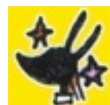
じゃれついたり すりよったり ころげたり
いきもののような雲たちを 落ち着いてたわむれさせながら
一点 きりっと頭を向け 尾をふうっとあげた

「変な虹がでてる」
だれかが 思わず そうっと

四足で立って 絵のような姿で遠吠える その視線の先にいた
ゆらめき 空をよこぎるうちに みえなくなった 虹色の何か

意識を覆う 眠気の沼のようだった まぶたの間に しばらく残った

・ ・ ・



犬先生：おこたつぐふう...ハッ！

ふむ何であろう、この質感は...わふうあったか〜い



ラクシャさん：あ、あのきみたち

ナゼまどろみつつ 僕の尻尾モフモフとっ



ほんとうに小さな仔犬2ひき 前足つないで立っていた
絵のような海の見える 白木の廃屋の端

黒い仔は桃色の残る鼻をくくんさせ 赤い目でみまわして
白い仔は桃色のふちした目 とじたまま こすり すこしふるえて

こどもの頃ここに住んでいた どうにも気になって見に来たが
来なければ良かった気にもなり 庭だった草地なんとなく 片付けていた

黒 はるかな地の壁画のように 小さいながらも すくくと立ち
白い仔をまもるように 尾をそらに巻き または柔らかく気ままに振り

白 翼か羽衣もつような ふしぎな清らかさを漂わせ なれど儚く
黒い仔をまもるように 雲のような尾ひろげ または風になびかせ

おいでおいで、とそうっというと 目をよおく見据えてから とことこと
せめてなでてあげたかった こんなにいたいほど 寒い中

さわれなかった 手が光のちりに透けて見え 無性に鼻が熱くなり

わたしの手 挨拶代わりにぺろっとしてみせ あおん！と へんじ
2ひきはとことこ どんどん透けて みえなくなった

ああかれらは象徴だ そしてそれ以外の、いろいろでも
来てよかったんだ もっと歩こう 歩きたい 遠くはちかく 一歩ごと

思いかけめぐるまま　夕陽にむかい　その暖かさ　せまる闇に　また視界が潤んだ

・ ・ ・



犬先生：ぺろぺろぺろ...ぺふろ　ハッ！



ラクシャさん：あれ、隠れて僕の名前書いたアイスなめてるの、誰かな～



小さなラジオをそばに置いて、金色の穂波を見渡す丘
おさがりの自転車でいねいに拭いて はりきって出てきた

紫の目の渡り鳥 今年こそ 第一隊を写真に
ラジオ 砂嵐を挟みながら カントリー音楽とクッキーの宣伝 やっている
悲しみもまた大らかにうたう歌と さっき食べた自作の変な さんどいっちと
のどかな木漏れ日と 手を振る宇宙飛行士たちの映像 まどろみの中とけあう

とけあう中 ぼんやり見聞き 白と黒の何かずつ 木の上に
歌にあわせて尻尾を左右に はふはふした顔 してみたりして

なんだ どんないきもの？ 白い黒い なんだろう...
そのまま2匹は夢にも現われ 好き好きに ころころ ころげていた
そんな夢 なんだかどこか 前にも見た気が

したのもたしか
起きたらすでに 枝じゅうに鈴なり 暑い国寒い国 めぐる紫の目の鳥の群れ
揺れる木漏れ日が より眩しく なんだかスパイスの香りがした
また飛姿、見逃しちゃった

だけでも鳥家族 去年より少し数が増えてる
くるくると腹ふくらませて鳴く声にまじって えこーのかかった 2匹のあいさつ
れっどで一たとひとと白黒 星のつぶつぶで できた丘にて



犬先生：うおん...こたつ空間におれるのも、今年また あとわずかか...



ラクシャさん：来年また、ね。そのためにも、今から計画立てておこうかなっ



ふと ふしぎ

今いる場所 古代生物が這い 歩き たたかったり食べたりしていた
見たこともない木が生えてたり ちいさなものたち ひしめく海底だったり
原始の人 原始の犬さん連れて 暮らしただろうか
人 階級 街 国 どんな世界に 見えだろうか

はたまた未来 ちかくから遠く
どんな技術が 広がるだろう
いつか太陽 燃え尽きるといふ
いつか月 見えぬほど遠くへ行ってしまふといふ
沈み うかび 海と大陸
ひとのあとの 世界はどんなか

なにもないようで みえぬようで きつとそこには なにかがある
そのなにか どんなだろう

考えるうち

忘れようとした苦さと 暖かさへの情けなさ 比べ得ぬ童心の影とが
ココを穏やかにしめていく

帰郷 縁側 空想の神殿遺跡と 大好きな漫画の衝撃のラストと ねぎの新鮮なうどん
陽だまり 抜け出しそこなった蛹のように横たわり 隙間風には少し震え

目の端 塀の上に 白と黒の犬たちをみた
黒 ガラスをすり抜け 尾を壁画のように渦巻かせ すうっと
白 暖かく照りながら 尾を雲のようにふわりと振り のんびりと

アルマンダインの赤い目と　アクアマリンの青い目　人懐っこく

なぞの涙あと　ぺろりとしたり　頭に足かけ　くんくんしたり
張りのある母の声に驚き　2匹は超常にとび　煙と消えた

もちつき　腰にカイロを貼り　でっかくなつたなんて言われながら
照れ笑い　からみとあべかわ2つずつ　新しい朝

・　・　・

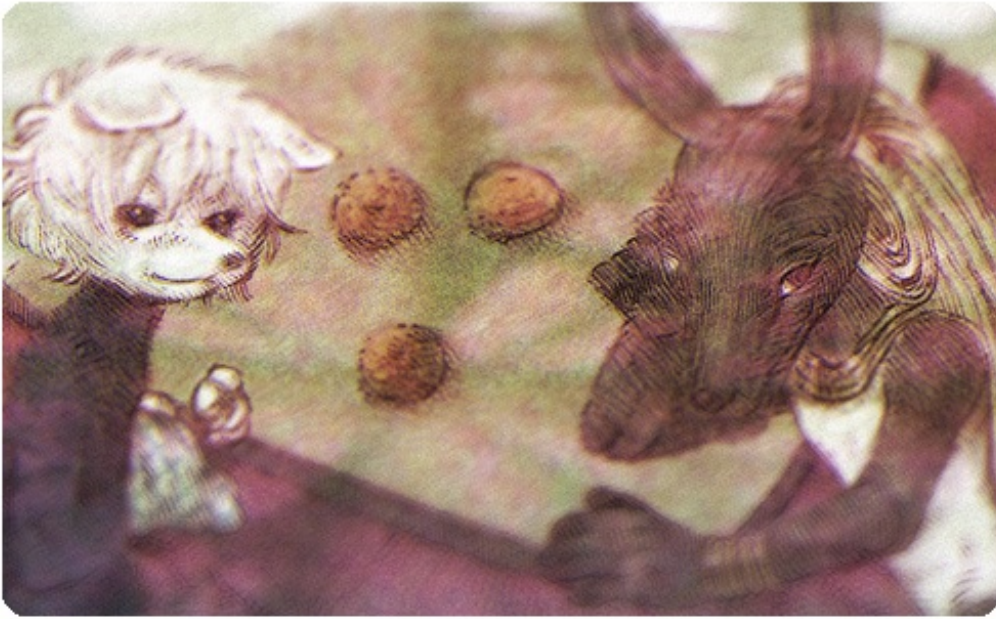


犬先生：んがぐぐっ...



ラクシャさん：わあだから餅はよく噛んで食べなくちゃ！
すまない、お水いいかな？

また、らいねん



Thank you 2014,
Let's go 2015!

この黒白犬さんず、もうはるか前から たびたび夢に現れます。

たすけてくれたり、まどわされたり、ただほこほこあそんだり、
はたまた よくわからない何かをなさっとるのを 眺めていたり

今やもう、実体の無いだけの 家族のような 空想です。

そんな彼ら、なぜかじつは１２月だけ 安全に一緒のんびりでけるらしき。

（普段は互いの正反対な不思議ぢからが反発して影響しあってしまう的なにか）

ただ善悪なだけでも、聖邪なだけでもない、へんてこなかれら
こんどはだれのどんな夢に 出かけていくのだからっ？

． ． ．

おおっと、いぬせんずより ごあいさつがあるようです。



犬先生

：やぁやぁ諸君、鍋は食べておるかな？

私はもう魔域に帰るが、魔法の足跡を残しておくよ。

さあどんな魔法が飛び出すやら 出ないやらフフ...

ではまた、12の月に。



ラクシャさん：ご安心ください、後できちんと拭き取っておきますから。

年越しの準備など、お済みでしょうか？

おいしく未知の お茶とお菓子を置いていくので、㍻㍻でどうぞ召

し上がれ。

では、よいお年を...！

いぬせんずの こたきおtime

<http://p.booklog.jp/book/93051>

著者：謡犬 ユネ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuneutainu/profile>

今年も12月はこたつ&いぬずでした。

「ゆる夢画帖」、来年もふんばります。

それでは、2015 ふぁんたすていっくなお年をっ…！

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93051>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93051>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ